

『とりかへばや物語』における女主人公の生き方

——「家」に束縛される女君——

庄 婕 淳

一、はじめに

『とりかへばや物語』は平安時代後期の成立とされる、異性装をテーマにした物語である。異母兄妹である内向的な男主人公と外向的な女主人公が、本来の性とは異なる社会的な性別を付与され、やがてそれぞれに秘密をかかえて宮廷に出仕し、様々な事件に遭遇しながら、結局は生来の性に戻り、男主人公は閑白に、女主人公は中宮にと栄達するまでを描く物語である^②。

明治時代の酷評は払拭され、現在、『とりかへばや物語』を愛情の種々相を描き出すものとする理解がすでに定説になっている^④。またこの物語は、『源氏物語』から始まる、「焦点を女の方にしほって、その人生の変転を辿った」〈女の物語〉であると指摘され^⑤、『源氏物語』から『夜の寢覚』へと連なる王朝物語史上の転換点に位置する重要な作品であると評価されている^⑥。

『とりかへばや物語』は、婚姻・妊娠・出産といった女性の人生における重要な課題をめぐって、女主人公をはじめ、数人の女性の生を描いている。とくに、女主人公には、秘密の妊娠と出産を経験させているのである。『とりかへばや物語』と密接な関係をもつ『夜の寢覚』も、女主人公である中の君の突然の契りによる妊娠と秘密の出産を描いている。この展開について、「読み手の〈女〉たちが女主人公と我が身とを引き比

べ、心情を想像し共感する「仕掛け」とする指摘があることは重要である^⑦。

さらに、女主人公の生き方を考察する上で有効と考えられるのが、「家」の視点である。『とりかへばや物語』を「家」の視点から考察するのは、鈴木弘道が親子間の愛情を描き出したとして、この物語を再評価したことが発端であろう^⑧。その後、神田龍身、西本寮子、伊達舞の一連の論考では、特に「家」の存続に焦点を当て、家の繁栄にかかわる子どもも存在に注目している^⑨。しかしながら、『とりかへばや物語』における女性の生き方、とくに女主人公の生き方についての「家」の視点からの考察はまだ不十分であろう。

『とりかへばや物語』では男装した女主人公の婚姻だけでなく、その妊娠と出産までも詳細に描いている。しかし、先行研究で、こうした物語展開や出産に関わる具体的な描写を分析の対象として取り上げたものは見出せない。以前、稿者はこの物語の妊娠表現について、『源氏物語』『夜の寢覚』などの先行物語からの影響について検討したことがある^⑩。本稿は、こうした先行研究を踏まえ、女性の生を庇護し、またその性を管理する「家」という視点から、『とりかへばや物語』の女主人公の特質を考察することを目的とする。

二、平安時代の女性の婚姻・妊娠・出産

まず女性の婚姻・妊娠・出産と上述の「家」に注目し、平安時代の文学作品を概観しておきたい。

平安時代の文学作品の多くは、「婚姻」を通して、女性が父の「家」を出て夫の「家」に帰着する、という展開をもつ。たとえば『落窪物語』で落窪姫君は、あこぎをはじめとする侍女や従者の助けによって、継母に虐待されていたもの「家」、つまり父親の「家」を脱出して、最後には男主人公・道頼と一緒に新しい「家」を築くことになる。理想的な恋人と出会い、ついに男女が結ばれることで、物語が完結するのである。

したがって、女性の「妊娠」と「出産」という事象についても、「家」という枠のなかで描くのが通例である。「妊娠」と「出産」は、「家」の永続的な継続を保証するものである。女性が父や夫の家で、多くの人に囲まれ、大切にかしずかれるなかで、家の跡継ぎなる男児や女兒を産む場面は、物語に多く描かれている。『源氏物語』葵の巻で、父左大臣と母宮、源氏に囲まれて、絶え間ない祈禱のなかで、葵の上が夕霧を出産したのもその一例である。

それに対して、安定した「家」に属さない女性たちはどうであろうか。『源氏物語』以降、このような女性もしばしば文学作品に登場するようになった。そうしたなかで、『とりかへばや物語』を考察する上で重要であると考えられるのが、『今昔物語集』巻二十七に収められている「産女行南山科値鬼逃語第十五」という説話である。以下その冒頭を引用する。

今昔、或ル宮仕シケル若キ女有り。父母親類モ無ク、聊ニ知タル人モ無ケレバ、立寄ル所モ無クテ、只局ニノミ居テ、「若シ、病ナドセム時ニ、何カ、為ム」ト心細ク思ケルニ、指ル夫モ無クテ懐任シ

『とりかへばや物語』における女主人公の生き方

ニケリ。

然レバ、弥ヨ身ノ宿世被推量テ、心一ツニ歎ケルニ、先ヅ産マム所ヲ思フニ、可為キ方無ク、可云合キ人モ無シ。「主ニ申サム」ト思モ恥カシクテ不申出ズ。而ニ此ノ女、心賢キ者ニテ、思得タリケル様、「只我レ其ノ気色有ラム時ニ、只独リ仕フ女ノ童ヲ具シテ、何方トモ無ク深キ山ノ有ラム方ニ行テ、何ナラム木ノ下ニテモ産マム」ト、「若シ死ナバ、人ニモ不被知テ止ナム。若シ生タラバ、然氣無キ様ニテ返リ参ラム」ト思テ、月漸ク近ク成ルマ、二ハ、悲キ事云ハム方無ク思ケレドモ、然氣無ク持成シテ、蜜ニ構テ、可食キ物ナド少シ儲テ、此ノ女ノ童ニ此ノ由ヲ云イ合テ過ケルニ、既ニ月満ヌ。

物事しらぬ女の童一人だけを従え、一人で出産の計画をする女性の説話である。「父母親類モ無ク、聊ニ知タル人モ無ケレバ」、「指ル夫モ無クテ」というように、父もなく、頼れる夫もなく、家父長制社会で、しかるべき「家」の庇護を受けられない女性の苦難が描かれているのである。女は、生まれてきた子どもを、「子ヲバ人ニ取セテ養セケリ」と、自ら養育するのではなく、養子として出すことを決めている。当時、女性の出産は命を脅かす危険なものであるため、この女性は、「若シ死ナバ、人ニモ不被知テ止ナム。若シ生タラバ、然氣無キ様ニテ返リ参ラム」と、もし死んだら妊娠と出産のことは世間の人に知られずに済むことができ、もし生きていれば、何事もないように帰ろうと思案しているのである。出産に際しての心情がここまで丁寧に描かれることは、他の物語文学に比べて非常に稀な事例であると言えるであろう。そしてそれは『とりかへばや物語』の女主人公の詳細な心中思惟表現とも類似しているのである。「家」の枠組みから逸脱する「妊娠」と「出産」を描くものとしては、密通による不義の子の妊娠・出産の事例もある。特に『とりかへばや物

『語』に深い影響を与え、同じく〈女の物語〉に属する先行物語『夜の寢覚』では、女主人公である中の君が、姉の大君の夫である権中納言との予期せぬ逢瀬により、妊娠してしまった事例が描かれる。その出産を済ませるため、彼女に付き添う対の君は、権中納言と手を組んで計画を立て、中の君は密かに石山で姫君を出産し、その姫君を権中納言が扶養するという展開が描かれている。

以上の事例を踏まえ、『とりかへばや物語』における女主人公の婚姻・妊娠・出産に関連する記述を分析したいと考えている。

三、『とりかへばや物語』における女主人公の婚姻・妊娠・出産

まず、『とりかへばや物語』に記されている女主人公の婚姻・妊娠・出産をめぐる記述を時系列に、以下の表に整理する。

年齢	女主人公
十六歳	▼四の君と結婚する
十八歳	▼初秋、宰相中将と契る ▼十月、 ^① 妊娠発覚
十九歳	▼七月初旬、宇治の若君出産
二十歳	▼正月、帝と契る ▼三月、 ^② 妊娠発覚 ▼九月過ぎ、皇子出産

この背景について説明しておこう。

女主人公の妻である四の君は右大臣の最愛の末娘である。男装する女主人公の優れた人柄が右大臣の目に留まり、十六歳の時、女主人公は右

大臣の望みによって三歳年上の四の君と結婚する。十八歳のある残暑厳しい日、男装の女主人公と語り合っている宰相中将は彼女の姿に惑乱し、近づくことであることを知り、つい彼女と契ってしまった。その後も女主人公の乳母の家で密会をする。その後の十月、女主人公は自分の妊娠に気付く^①。

翌年、妊娠によって窮地に陥った女主人公は宰相中将に従い、宇治に身を隠すことにする。女主人公の失踪の後、女装の男主人公は彼女を探しだすために、男装に戻り、旅に出る。

男君の助けで、出産後の女主人公は宇治から脱出する。きょうだいはお互いの身分を交換し、女主人公は女一宮の出産を助けるために入内する。正月、帝は女主人公を慕うあまり、彼女の住んでいる宣耀殿に闖入し、思いを遂げた。三月、女主人公は帝の御子を懐妊する^②、という展開である。

まず、女主人公の二回の婚姻に関する記述を分析し、その詳細を辿る。幼い頃、内向的な男主人公と外向的な女主人公の異母きょうだいが、その性格により、異性装させられ、それぞれ美しく成長する。「元服」「裳着」といった成人儀礼を通し、二人はそれぞれ宮中に出仕する。自分の置かれた状況の異常さを自覚している女主人公は、常にその身の上を嘆いているが、その容貌の美しさと才能の高さは、元服の時に引き入れの役を担当した伯父にあたる右大臣の目を引く。そこで、父左大臣に、婿取りの意を打ち明けられる。

(右大臣は) この中将の君、人柄もいとこよなくまさりて、いささかあだあだしく軽びたる振る舞ひなどすとも聞こえぬにますことあるべきならねば、それに思し定めて、父大臣にも聞こえたまへば、をかしと思しながら、なにかは、いかに言ひてかあるまじきことと

はものせん、と思して、「いかなるにか、かやうに世づきたる心はゆめにもはべらざるは。さりとまめやかなる方ばかりは、いとよく人に御覽せらるべきものにはべり」と受けひき申したまひつ。北の方に、「かくなん」とのたまふに、「子めかしからん人のむすめの、あやしなど思ひ咎め言ふべきならず。ただうち語らひて、人目を世の常にもてなして出で入りせよかし」とうち笑ひて、「よき後見なり」とのたまふ。まだいと若くおはすればうしろめたかりぬべけれど、あうなくはまたおはすべくもあらぬさまなれば、心やすくて、御文書かされたまつりたまふ。何事も思し分かず、男どものなかにも好もしくのみ聞きならひたまへれば、懸想の方にこそはとて、

これやさは入りて繁きは道ならん山口しるくまどはるるかな

と書きたまへる、えも言はずめでたき見ものなり。御年のほどを思すに、いかでかかりけんと、をかしくもあはれにも涙ぐまれたまふ。右の大臣には、からうして言ひおもむけたまへることなれば、御返事そそのかして書かされたまつりたまふ。

麓よりいかなる道にまどふらん行方も知らず遠近の山

かくて後は、常に聞こえたまへば、我すすみたまひにしことなれば、その日と思したちになり。いとやんごとなき本意おはする人にて、すぐれてかしづききこえたまふ御むすめに、大殿の三位の中將を取り寄せたまふ御気色有様、何事もなのめよろしからんやは。

(183頁〜185頁)

『とりかへばや物語』における女主人公の生き方

父左大臣は、この求婚を意外のものと思ひ、女主人公の母である北の方に相談する。そこで、北の方は、四の君が子供のような女性なので、怪しむこともないだろうから、普通の夫婦のように振る舞えばとその結婚を勧める。そこで、女主人公は、四の君宛に、懸想の文を送った。四の君も右大臣に唆されて女主人公に返事をする。このように、二人は、表面だけの結婚生活に入る。つまり、二人の女性（一人は男装して、表面的に息子であるが）の婚姻は、その両親、とくに父親の一存で決められたことがわかる。

女主人公二回目の婚姻は、きょうだいが異性装を解き、身分を交換した後のことである。女一宮の秘密の出産を手伝うために、女主人公は尚侍として、入内したのである。女一宮の出産を済ませ、女主人公を女一宮と一緒に院のもとに移すか、または里に帰らせるかとの選択で、帝は、女主人公を自らの側に留めて世話をしたいと、父左大臣に再三に相談する。それを受け、入内の妨げとなる異性装の秘密がすでに解消している以上、同意してもかまわないと、父左大臣は、以下の引用のように、喜んでそれを承諾する。

(父左大臣は)今はいとうれしくて、「たびたび御気色はべりしも、かつがつ年ごろの本意かなふ心地しはべりて限りなくよろこび思ひたまへながら、あさましき不用の人と思ひたまへ捨てはべりて、御気色にも従ひはべらず。今とてもさる方に思しめし捨てさせたまはざらんなん、かたじけなくうれしうはべるべき」とて、涙をさへこぼしてよろこびたてまつりたまふものから (442頁〜443頁)

その後、年が変わり、帝は、女主人公の住んでいる宣耀殿に忍び、彼女と契りを結んだ。次の日に、後朝の文を女主人公に届けるために、わ

ざわざ男主人公に頼んでいる。それは、「大臣の見たまはざらむには心得ず思ひなして、返り事ふとあらんこと難かるべければ、わざとものしつる」(455頁)と、帝は、父左大臣の承諾なしでは女主人公も返事をするのが難しいと判断したからである。同じ文言は、返事を唆す男主人公に対して、女主人公の「大臣なども知りたまはで、心さしからに御返聞こえんも、さこそかならずとのたまはずとも、御心劣りせぬやうはあらじを」(456頁、457頁)との発言にも見られる。こうした事例からも、女主人公の婚姻に関して、父左大臣が管理する「家」という存在の大きさが看取できるだろう。

このように、女主人公の二回の婚姻は、いずれも父左大臣によって決められたものである。そこから、「家」という制度が、女主人公が男装しているにもかかわらず、彼女を束縛していることが知られるのである。

女主人公の妊娠・出産の記述を見ると、二回目の妊娠は、その婚姻と同じく「家」という制度そのものを体現していることが分かる。前述したように、女装に戻り、女春宮の出産を手伝った女主人公は、正月、帝の侵入で意外な契りを結んでしまう。それ以降、帝の限らない寵愛を蒙り、「内侍の督の君もこの春ごろよりただならすなりたまへる」(466頁)と、その妊娠を告げられている。出産については、詳細な描写がなく、「うち続き、督の君の御こと今は一筋に思しあつかふに、おどろおどろしくも悩みたまはで、男宮生まれたまひぬ」(500頁)と簡略に記述されるのみである。それに対し、産養については「御産屋のほどのこと、言はずとも推し量るべし。三日の夜大殿、五日春宮の大夫、七日内裏より、九日大将殿など、心々にいどみ尽くし心を尽くして仕うまつりたまへる、いとめでだし」(501頁)とその盛大さが詳しく語られている。そこからも、女主人公の二回目の妊娠と出産が「家」として重大な出来事であったことが読み取れるのである。

そこで思い出されるのは、男装時代の一回目の妊娠と出産である。皇子の誕生を喜ぶ周囲の人々とは裏腹に、女主人公は、「若君の御折のこと忘れたまふべき世なし」、「ただ人知れぬ人の生まれたまへりしほどとおぼゆるに、いみじうあはれにて、御涙ぞほろほるとこぼれぬる」(501頁)と、かつての秘密の妊娠と出産を回想し、泣いているのである。これは、父左大臣とは決して共有できないことであった。次節で、その記述を詳細に分析する。

四、女主人公の秘密の妊娠・出産

宰相中将の突然の侵犯から始まる二人の関係は、男装の女主人公十八歳の初秋の暑い日から始まり、六条の乳母の家での密会を経て、その年の十月に、女主人公の妊娠発覚を一区切りとして落ち着く。宰相中将と密会を重ねた女主人公は、「十月ばかりより音無しに里に居籠ること止まりて、心地例ならず」(291頁)と、「月の障り」が止まり、「例ならぬこと」でそのすぐれない気分を表現している。その後もずっと気分が悪く、「つゆ橘、柑子やうのものも見入れず、つきかへしなどしたまふを」(292頁)と、悪阻の症状が出る。四の君が懐妊していた時の症状を思いだし、「さる人こそかくはあれ」(292頁)と自分の妊娠を覚る。妊娠に対する自覚に関して、女主人公と先行物語が描いている女性たちとの相違点が歴然と現れているのである。

最初に例としてあげたいのは、『源氏物語』の藤壺と『夜の寝覚』の中の君である。

藤壺は、源氏との密通の後、病で臥しているが、やがて、「三月になりたまへば、いとゆるきほどにて、人々みたてまつりとがむるに」と、周囲の人々によって、その妊娠を気取られる。

『夜の寢覚』の中の君については、中間欠巻部があるため、一回目と三回目の妊娠のみ辿ることができる。一回目の妊娠の時、まず地の文で「この三月ばかりは例のやうなることもなく、おのづからとれて見ゆる御乳の気色などを、御方（対の君）は見たてまつり知りたまふ」とあるように、対の君は中の君の身体変化から彼女の妊娠を察知したことを描いている。三回目の妊娠の時、中の君の発病の様子を、「かしこには、五月つごもりごろより、御心地例ならず苦しうおぼさるれど」と「例ならず」型の表現で語り出されている。その後も「つゆ重湯などやうの物をだに見も入れたまはず」のような悪阻に似る症状が表れているが、「四月ばかりになりたまひにたる御乳の気色など、紛るべくもあらぬさまなるを」とやがてその身体的変化から男君が中の君の妊娠を察知する。

このように、妻である四の君の妊娠から経験を学んだ設定となつていゝるが、『とりかへばや物語』の女主人公は、他の物語が描いている女性たちと異なり、自分の妊娠に自ら気づき、主体的にそれに対処していくのである。

才能と容貌、何事においても優れていた女主人公は、妊娠によつて窮地に追い込まれてしまったのであつた。男装の身と妊娠という二つの秘密を抱えている女主人公は、『今昔物語集』巻二十七に描かれる女性と同じく、自力で出産について計画しなければならぬ。その心中思惟は、以下の二つの引用によつて、鮮明に描き出されているのである。

中納言（女主人公を指す）の御心のうちに、さる人こそかくはあれ、この女君などもかくこそはものしたまふめりしかと思し合はするも、言はん方なく心憂く、まことに今ぞ跡はかなくも行き隠れぬべき心地する。心ひとつには思ひやる方なし、さりとして我こそかかれと人に言ひあはずべきことにもあらず、親などにも待ち思さんこと

『とりかへばや物語』における女主人公の生き方

いといみじう、恥づかしさをばいかげせん、なほかの人にや知らせて同じ心に思ふべき、逢ひ見ぬ恋の重なるまに、恨みわび、忍びかねても人目をつつむべくもあらぬもいとわびしう、またあやしかりけるわが身の契りを思ひ知るにもこの人はさし放ちがたうあはれなれば、六条わたりに行きあひて、待ち聞かんところも恥づかしけれど、男の姿となりたまひにければ、さは言へど、面なく、「かういみじきことを嘆き重ぬるに、月ごろになれば、いと契りも恨めしう、疎ましきまでなん」と言ひ出でたるを、
(292頁～294頁)

傍線部のように、女主人公は、妊娠は人に告げられるようなことではなく、ましてずっと自分の病気を心配している両親がその真相を知つたら心を傷めると考え、「かの人」、つまり宰相中将としか秘密を共有できないと思つていたのである。

この人に靡かんことはあるまじく思ひとりても、ただ軽らかなる御身ひとつならば吉野の宮にも身を隠しつべけれど、仏のあらはれたまへるやうなる御あたりに、ともかくもあらんこと、いと無心に便なかるべし、御むすめどもさばかり恥づかしげなめるに、あやしあさましと見えきこえんもいとほしかるべし、それよりほかはた、さは言へど無きに、心を心とたててこの人をさへ隔て恨みて、親しと言ひながら、乳母などやうの人にもかかる有様扱はれんこと恥づかしかるべしと、さらに思ひわづらひぬ。さはいかにせんと、後行く末までいとわづらはしや、かかるほどはなほこの人に従ひて世をも背き隠すばかりと、ところせく世づかぬ有様を異人に見扱はれん、あやしかるべかりけりと思ひ直して、その日ばかりと契り定めて、まづ吉野の宮に参りたまふ。

(313頁～314頁)

この引用で、女主人公は思いを巡らし、宰相中将と宇治に身を隠す日時を約束するのである。吉野の宮の居所は仏道修行の地であり、また二人の姫君のことを考慮し、出産するには相応しくないと女主人公は判断している。そして、乳母にこのようなことを手伝ってもらうのは恥ずかしいと思ひ、やはり男装の事実を知り尽くした宰相中将に助けてもらったほうがいいと思うのである。しかし、傍線部で示しているように、女主人公は、決して宰相中将に靡くことはないと自ら戒めるのである。

このように、父左大臣の「家」から離れ、女装に戻り、女主人公は、宰相中将の庇護で、素性知れぬ女性として、宇治に身を隠すことになる。宰相中将の子を身籠っている四の君は右大臣に勘当されたので、宰相中将は、その面倒を見るため、京と宇治を行き来している。このことは、宰相中将に対する女主人公の不信感を増幅させるばかりである。宰相中将にはその心情を吐露しないまま、女主人公は、男装の身に返ることはせず、無事に出産できれば、吉野で出家することを決心したのである。この思いは再三、文中で語られるのである。以下の引用Ⅰと引用Ⅱの傍線部からは、女主人公の出産前後の心中思惟には一貫した心情が見られるだけでなく、引用Ⅱからは、女主人公が自分の置かれている現実に対する冷徹な認識があつたことも伺えるのである。

Ⅰ 人は我に劣らず深き方に心を分けて、これに五六日、またかれにさばかりと籠り居たまふ絶え間を、さもならず、待ちわたり思ひ過ぐさんこそあいなく心尽くしなるべけれ、さりとてもとの有様に返りあらためなごせんことはあるべきことならず、ともかくもたひらかにもしあらば、吉野に参りて尼になりてあらん、と思すを慰めにしたまへるを

(352頁)

Ⅱ かくのみこそはあるべきなめれ、わが心ひとつにこそよろづのことにつけて嘆き絶えせざりしか、大方の世につけてはかたはらなくなりにし身を、あいなくもてしづめて、類なくだにあらず、かくのみ待ち遠に思ひ過ぐさんことこそ、なほあるべきことにもあらね、右の大臣、世人の言ひ騒ぐほどなほしばし勘じたまふにこそあらめ、世になうかなしくしたまふ御むすめにて、ひたぶるに一方に思ひ許したまはば、あなた強にこそあらめ、我いかなりともその人と知られあらはるべきやうなければ、かかる宇治の橋守に、網代の氷魚のよるのみ数へんほどの心尽しや、さりとてもとのままに返りなるべきにもあらず、いかにして吉野山に思ひ入りて、後の世をだに思はん、と思ひなるには、この若君の捨てがたく憂き世のほだし強き心地したまふ。

(364～365頁)

一度は勘当されたものの、右大臣最愛の娘である四の君は、いずれは許されるだろう。そして、素性の知れぬ女である自分は、きつと四の君に圧倒されるであろう。この運命から逃れるために、吉野で出家するべきだ、と女主人公は考えている。

そこで、男主人公は男装に戻り、吉野の宮を介して、宇治で女主人公と再会する。女主人公は吉野で出家したいと打ち明けるが、男主人公は家に戻り、自分と入れ替わって暮らすようにと勧める。尚侍としての女主人公のもとへ宰相中将が通っているのも「道理のこと」と言われているが、女主人公は、「かくてこの人に行方知られであらばやと思ひはべるなり」(376頁)、自分の行方を宰相中将には知られたくないと言う。男主人公が、宰相中将は結婚相手として相応しいので、そのような考えはよくないと諭す。女主人公は、仕方なく家には帰るが、「殿に、かくてこそありければは聞こしめされじ」(376頁)とあるように、父左大臣に

は宰相中将との一件を知らせないようにと男主人公に対して念を押す。なぜなら、宰相中将と縁を切りたくても、男主人公がいうように、適当な結婚相手と見なされる宰相中将は、父左大臣にも婿として認められてしまうからである。宰相中将との婚姻を避けるため、女主人公は父左大臣に対して、妊娠と出産のことを終始秘密にしたのである。

辛島正雄は、女主人公と四の君の辿る運命の類似性について以下のよう論じている。^⑩

——女には、自らの人生を選択することも許されないのか。いかに賢く身を処そうとしても、流れに身をまかせるだけの女と、どれほどの違いも出てこない。女がなにを考えていようが、そんな思いなどお構いなしに、結局は男の一方的な都合によってその運命は決定されてしまうのなら、そもそも女の努力など空しいではないか。なにも疑問をもたなければそれでもよいだろう。だが、男とかかわることがかくも欺瞞に満ちていることを知った女は、どこに自らの拠り所を求めればよいのか。出口は、見えない——。この知的でサービス精神旺盛な物語を内から支えていたのは、諦めにも似たかくも苦い「世の中」への認識であったらしいのである。

確かに、男女の不平な社会構造では、女性には男性によってその運命を決められてしまう。しかしながら「家」という制度こそが女性を強固に束縛している事実も見逃してはいけない。男装の女主人公をとりまく婚姻・妊娠・出産の記述を分析してわかるように、『とりかへばや物語』の女主人公には、他の平安時代物語の女主人公に見えない主体的な努力が見られる。自分の妊娠に気づき、その出産を計画し、「心強さ」を以て、不誠実な男性との仲を断ち切る。さらに、強制的な婚姻から逃げるため、

『とりかへばや物語』における女主人公の生き方

父左大臣にはこの一件を秘密にする。これこそは〈女の物語〉である『とりかへばや物語』の新しさであると評価できるだろう。

物語結末の女主人公に対して、星山健は『とりかへばや物語』を〈女の物語〉の系譜に位置付けた上で、以下のように論じている。^⑪

これまでの〈女の物語〉に語られてきた女性の生きがたさとは、例えば『蜻蛉日記』などからもうかがえる、まさに当時の現実社会における女性の実情に根ざしたものであった。厳しい社会制度下において女はいかに生きるべきか、その救済は可能かというテーマを負った〈女の物語〉に対し、『とりかへばや』は、不実な男を捨て自らは后として栄華に輝くという、答えにならない答えを導き出してしまったのである。なお、古本における異装の女君が、最終的に宮宰相（後に内大臣）の妻として納まったことは、『物語二百番歌合』から明らかであり、男を捨て後に后となるという展開は、古本にはなかった今本独自の要素である。

実際、「答えにならない答え」と評される女主人公の后となる結末にも、「家」というものの強固な束縛からは遂に逃れることができず、再び管理された「家」のなかで生きるしかない女君の我が意に添わぬ境遇が読み取れるであろう。前節では、女主人公の二回目の婚姻・妊娠・出産について、父左大臣の影響力の大きさについて論じたが、ここで、さらに帝との関係について、女主人公の心中思惟を辿ってみたい。帝から強引に関係を結ばれ、さらに次の日に男主人公に帝からの後朝の文を渡されたが、女主人公は、「人も知らずやみなんをこそたけきこと」（456頁）とあるように、このことを秘密にしたいと考えている。きょうだいである男主人公に対しても、事情を悟られないように冷静に振る舞っている。

このように、女主人公の主體的な努力はあるものの、結局、帝の態度から事情を察知した男主人公は、父左大臣に二人の関係を報告する。そこで、父左大臣は喜んで成り行きを受け止めるのである。つまり、『とりかへばや物語』は、女性の生き難さを、女という抑圧された存在への眼差しだけでなく、「家」という管理された制度からの束縛の結果としても描いているのである。

五、おわりに

女性の性が父あるいは夫の管理下にある時代、『とりかへばや物語』の男装の女主人公の婚姻・妊娠・出産は、やはり当時の文学作品と同じように「家」の枠のなかで描かれていると言えるであろう。しかし男装時代の妊娠と出産は、女主人公にとって想定外のものではなかった。「家」の庇護から離れ、命さえ失いかねない不安を抱えて、女主人公は一人で孤独に妊娠と出産という大事に対処している。これは、『今昔物語集』巻二十七に描かれる後ろ盾のない女性と同じ境遇なのである。女主人公は、冷静に自分の立場を見据え、愛おしい我が子を捨て、父左大臣に対してはこの一件を秘密にすることにより、宰相中将との悪縁を断ち切った。このように、『とりかへばや物語』は、『五障三従』に束縛される同時代の女性の苦境を、婚姻・妊娠・出産といった女性の人生の課題とからめて、男装の女性という特異な主人公に経験させた物語であるとも言えるのである。

石壁敬子は、「さまざまな場面でわが身を嘆き進退に窮しつつも、『今とりかへばや』の女君は、男として生きた過去の経験で培われた自分の判断と責任において打開の道を選び取ってゆく。それはこれまでの女君にはない強さであった」と女主人公を評価している。^④確かに、女主人公は、その束縛から脱出しようと主体的に努力した女性として、評価できるだろ

う。しかし彼女は管理された「家」から逃れることは叶わなかった。つまり『とりかへばや物語』とは、女主人公の婚姻・妊娠・出産を描くことによって、女性に対する「家」という制度の抑圧を暴いているともいえるであろう。とくに、女主人公に用意された結末が、星山健が指摘したように、「男を捨て后になるという、とうてい現実的な解決とは言えない答え」であるとするならば、この物語は女性の生き難さを生み出す管理された社会構造の背後にある「家」という大きな存在——つまり絶対的な家父長制——を表現しようとしているともいえるだろう。

注

- ① 『とりかへばや物語』は古本と今本とがあるが、現存するのが今本である。本稿はそれを考察対象にする。
- ② 男君と女君はどちらが年上かはつきりしていないため、本稿は「きょうだい」で表記する。
- ③ 藤岡作太郎『国文学史 平安朝篇』1905年東京開成館、「東洋文庫」1971年平凡社参照
- ④ 鈴木弘道『平安末期物語論』1968年塙書房、鈴木弘道『平安末期物語の研究』1960年初音書院参照
- ⑤ 辛島正雄「今とりかへばや」の定位『堤中納言物語 とりかへばや物語』1992年新編古典文学大系
- ⑥ 星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』——「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉——『王朝物語史論…引用の「源氏物語」』2008年笠間書院 2006年初出
- ⑦ 宮下雅恵「〈女のカタログ〉——女たちの共感装置としての『夜の寢覚』——」『中古文学』第九十六号2015年
- ⑧ 鈴木弘道「とりかへばや物語に現れた愛情」『平安末期物語の研究』第三篇第二章1960年初音書院
- ⑨ 神田龍身「鎌倉時代物語論序説——仮装、もしくは父子の物語——」(『物語文学、その解体』有精堂1992年、1986年初出)、西本寮子「家」

の物語の時代」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版2002年)、伊達舞「『今とりかへばや』の〈家〉への志向―親子間の〈愛情〉描写から」(『国文目白』50号2011年)、伊達舞「〈家の物語〉としてみる『今とりかへばや』―『世づかぬ』異性装―」(『国文目白』51号2012年)、伊達舞「『今とりかへばや』の〈家〉への意識―血脈上の子どもから家系上の子どもへ―」(『国文目白』53号2014年)に参照。以上の諸氏は、父子関係を重視するところから論を展開している。本稿は、それと異なる視点で、女性の側に立ち、女性を庇護し、その性を管理する家父長制の「家」という側面から論を展開する。

⑩ 拙稿「『今とりかへばや物語』論―妊娠表現に関して―」『論究日本文学』99号2013年

⑪ 辛島正雄「『今とりかへばや』の女中納言と四の君とをめぐる断章―〈女の物語〉の思想、あるいはレイプの政治学」『古典研究(古典研究同人)』1992年

⑫ ⑥に同じ。

⑬ 「五障」は仏教でいう女性が生まれ持った五つの障害。「三従」は儒教が

女性に対する戒めである。共に女性に対する社会の抑圧を表している。この問題については、稿を改めて考察する。

⑭ 石埜敬子「『今とりかへばや』―偽装の検討と物語史への定位の試み―」『国語と国文学』八二―五2005年

⑮ ⑥に同じ。

※本稿の引用本文は全て新編日本古典文学全集による。なお、傍線と括弧内の内容は筆者によるものである。

謝辞

本稿の作成に当たり、ご指導いただいた中西健治先生、中本大先生に感謝いたします。また、言語においてご助力いただいた伊藤裕水氏、李嘉和氏に感謝いたします。

(本学大学院博士後期課程)